

諸本の関係は、第11表からみても、島9・内18・内10・内4の各本が島本系として同一系統であることは変らない。顕著な独自異文を数例あげておこう。

(島本系)

- ① (336-10) 契
- ② (348-9) 草
- ③ (356-7) なちきりそ
- ④ (370-5) 枕に

(他本)

- 類み
- つた
- なたのみそ
- しくまに

竜・書・穂の各本は竜本系としてまとまりをもち、丹本はそれに近い面と他本の性格をそなえている。内15本は、⑤「秋雨」の独自歌があるほか、本文面でも異文がめだつ。数例示しておく。

(内15本)

- ① (327-10) いほり
- ② (344-7) さらぬも
- ③ (345-5) たとらむ
- ④ (361-10) こむ人

(他本)

- 衣
- さえぬも(島)・さえぬる(他)
- たとららし(丹)・たとらるゝ(他)
- 住人

また、校合一本の巻七は、99箇所の校異数に対して、穂本とは27%しか一致しないのに対し、島9本とは73%、内15本とは44%一致するという(二論文)。田中氏はこの結果から、一本は、巻一同様、島本系や尊本系(田中氏は、秋本系とされる)の伝本であろうとされた。確かに第11表をみても、島本系の④の落丁が共通しており、島本系に近いと思う。ただ、島本系にある②がないので、全く同一系統にはたたないであろう(一致率も73%とやや低い)。

さて、「草根抄」が巻七から、百五十五首の抄出を行なっていることは先述したところである。ここで、巻六と同じ方法で、丹・書・内15・島9の各本を、「抄」の抄出歌の本文と校合してみる。すると、「抄」の独自

異文をのぞき、歌本文だけで、三十七箇所の異同を指摘できた。「抄」との一致数をみると、丹本16、書本25、内15本27、島9本23となり、丹本が一番離れ、他の三本は大差ない。この傾向は、巻六の場合と同傾向である。ただ、巻六では、書本の一致率が高かったが、巻七では、内15本が一番高くなっている点に注意されるであろう。

以上で、巻三から巻七までの伝本調査の報告を終えたい。巻七までくると、ある特定の伝本が、一つのグループとしてまとまってくる。従って、巻毎に検討するのは、繰り返しが多くなり煩瑣な面もでてくるが、すでに(上)編で述べたように、この伝本考は、単に「草根集」の系統分類だけ行なうのを目的としているのではなく、一つ一つの巻々を諸本と比較し、原本や定本の姿をできるだけ復元することをも大きな目的にしている。そのため、より具体的な段階で、欠如歌や配列などの相違に検討を加えている。今回は、紙面の都合で、巻七までとし、残りの巻八から巻十五は、次の(下)編で考察する予定である。

- 注1 「能登島山氏の文芸」(国学院雑誌・昭46・11)。
- 注2 拙稿「正徹における謫居説と草庵領没収事件の考察」(中世文芸・30号)。
- 注3 拙稿「島山匠作亭詩歌の諸本と成立について」(和歌文学研究・昭43・6)。
- 注4 拙稿「草根集の詠歌年代不記の巻に関する考察」(国語と国文学・昭41・11)。
- 注5 注4の拙稿に同じ。
- 注6 注4の拙稿に同じ。
- 注7 拙稿「内閣文庫本『草根抄』について」(国語国文・昭40・8)。

(追記)

上編で未見とした、南部家旧蔵(現八戸市立図書館蔵)の「草根集」三部(五冊本・一冊本・四冊本)は、その後、調査することができた。これは、三部にわかれるものではなく、あわせて十冊からなる類題本系完本で、延享二年の書写奥書をもつ。他の類題本と少しちがった形態をとるので、別に触れる予定である。

は大差ないことになる。内15本は書・島にくらべて少し一致が少ないが、これは、一方で古いと思われる本文を有しながらも、単純な誤写と思えるものが多いためである。勿論、この数値は、四本相互の関係を示唆しているのではなく、「抄」との本文の距離を示唆しているだけである。「抄」は、後の転写本なので、誤写や誤脱もあるうが、原本の姿の一部を継承するものとして、先の数値は一応の参考にはなるだろう。

十、巻七について

巻七は、巻二、三について、再び日次形式の編纂で、宝徳元年の詠草を収める。

巻七を所持する伝本は、丹・穂・書・竜・内15・島9・内18・内10・内4の各本である。それに「抄」が、この巻からも、百五十五首を抄出しているので参照できる。

まず、二本以上に共通する欠如歌から検討しておく。

第11表

番号	所在	歌題	初句	内15	丹	書	竜	穂	島9	内18	内10	内4	一本
①	326 9	岸上藤	咲しより	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×
②	338 -9	外山月	きりはてぬ	○	○	×	×	○	○	○	○	○	×
③	338 -1	寄柏恋	たか秋を	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○
④	339 340	簾築 <small>（往事催涙）</small>	十首と二詞書	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×
⑤	339 -3 -4	秋雨	おもふこと	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×
⑥	341 -4	遠村秋夕	山こえて	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○

①の「岸上藤」の歌に関しては、すでに巻四で触れたように、原本や定本の巻七にはなかったものと思う。次に、書・竜・穂の三本のみ共通する

欠如歌②⑥は、他の諸本にみえるので、巻七に元来存在したものであろうが、何故、この三本のみ欠如しているのであろう。実は、②の歌は、巻五(242-6)に、⑥の歌も同じく巻五(242-9)に各々重出している。竜本のこの巻は古写本の方であるが、例の重出歌削除の方針の結果、欠如したのではなかるうか。竜本系とも関連をもつ丹本にこの二首があるのは、他本との接触で追補したものかもしれない。③「寄柏恋」は、島本系に共通して欠如しているが、これは単純な誤脱であろう。④は、丹本でいえば「廿日西坊長海沙汰せし會の三首に」(339-9)の詞書から、十首の和歌を含み、かつその次の「廿二日佃導場と云寺にて或人よみ歌よみに」(340-3)まで約一丁分にあたるので、単純な落丁とみてよい。但しこれが存在するとすれば島9本など、丁の裏から表の、みひらき部分に位置するので、島9本の落丁でなく、親本以前に、すでに欠陥があったと思う(因に、この部分にある歌を「抄」は抄出している)。⑤は

⑤秋雨 おもふこときは心の秋にひく玉のをそむるなかきよの雨の歌だが、この歌は、内15本や諸本では、巻五(242-10)にみえるので、内15本では重出歌となる。他本にみえぬのは、重出歌なので削除したのか。すると、定本にも巻七にあったと考えられる。島本系は、ちょうど⑥の歌の掲載箇所が、④の落丁部分にあたるので「秋雨」の歌の有無が確認できない。しかし、島9本は、一面十一行書なので、一丁で二十二行、先の落丁部分を計算すると、歌十首と歌題で二十行、詞書二行、合計二十二行となり、「秋雨」の歌の入りこむ余地がない。従って、島本系でも存在しなかったと推定する(確認ではないので、第11表では?を付しておく)。他に、穂本には「閑中燈」(360-6)の独自の脱落歌がある。

日次形式なので配列異同は少ないが、穂本では、諸本で「十日或人の家にて読歌よみし中に」(337-7)の歌である「夕陽映島」(337-4)が、翌日の「十一日又或人諸神法楽とて百首よみし中に」(337-3)の六首目にある。これは、他本の位置にあるのが正しいだろう。

④	望遠帆	興へ行	⑨	山	柿	かく山の
⑤	述懐	老の波	⑩	神	祇	住よしの
⑥	暮山松風	くれにけり	⑪	胸消是非		世にすめは
⑦	田家鳥	秋の田の	⑫	譬喩品		有とみし
⑧	短夢	夢覚て				

この「他本に在之」の歌順を調査すると、丹本のような完全類題形式でなく、島本系のような不完全類題形式の本にそっていることが判明する。内15本または祖本は、島本系のような不完全類題形式の本とつきあわせ、欠如歌を追加したのであろう。第10表の⑩「馴不逢恋」と⑪「山」の二首は、先述したように、内15本巻六にみえるので、他本と比較の際に見落したのかもしれない。

さて、先の二十三首（うち二首重出）は、素稿本または原本や定本に存しなくて、後に補入した歌であろうか。⑫「譬喩品」などは、明らかに内15本の脱落である（因に「抄」にも存する）が、他はどうであろう。ここで定本以前の「草根集」の姿の一部を伝える「草根抄」の抄出歌と比較すると、⑭「寄衣恋」と⑮「短夢」が「抄」にみえる。従って、この二首は少なくとも、定本以前の原本にあったとみてよい。この二首だけで、他も類推するのは危険であるが、他も大部分、後の補入歌でなく、なんらかの事情で欠脱したのではないか、少なくとも、定本の段階には、存在していたと推定する。これは、巻五でのべた見解とも当然のことながら重なってくる。

ここで、各諸本の関係をまとめてみる。

内15本の独自性は、特殊な欠如歌や本文からみても動かないし、島9・内18・内10も以前の巻と同様に系統を同じくする。また、竜本には二首の付箋歌がある点をのぞけば、他は書本に同じ。竜本は「橋雨」の歌に「此

哥十三卷有」と注記するが、これは書・穂の両本にもそのままみえる。丹・穂も完全類題形式ということでも、竜・書に近い。新しく登場の河野本は不完全類題形式であるので、竜本系でないことは確かである。第9表で、②の歌があるので、内15本でなく、島本系に近いかと思われるが、④の落丁はないので、全く同一系統とはいえない。あるいは、尊本系かとも思うが、巻六が現存しないので確認できない。しかし、尊本と河野本は、巻十を所持するので、その段階ではめやすがつこう。河野本には、下句が欠如したりした不完全な歌が幾首もあり、その点が欠陥となっている。校合一本は、36箇所校異数のうち、穂本と94%、書本と94%、島本と94%、内本と74%と一致する由である（二論文）。

次に、「草根抄」には、この巻六から、恋部八十二首、雑部七十六首、それに、経文部歌全部（八十九首）が掲載されているので、定本直前（文明五年正月）の「草根集」の姿を知るうえで参考になる。

ここで、丹・書・内15・島9の各本を伝本の代表として、恋部・雑部の本文を「抄」と校合してみる。「抄」本には、例えば

① (268-8)	涙おちつゝ	(抄本)	涙こほれて	(他本)
② (273-3)	恨すよ		うからすよ	
③ (295-1)	うちおもひつゝ		思ひいてつゝ	

などのように、かなり判然とした独自異文をもつ歌が幾首もある。先の四本を校合していえることは、丹本が「抄」から離れて独自異文や誤写が多く、他の三本は大差ないことである。幸い、経文部歌は「抄」が全部抜書しているので、詞書・歌本文にわたって、四本と校合すると、「抄」の独自異文を一応除外して、四十三箇所異同箇所を得た。この部分の「抄」との一致を各伝本ごとに調査すると、丹本112、書本139、内15本132、島9本138の結果となる。丹本が大きく「抄」から離れた本文を有し、他

と、ちょうど、「窓前竹」(歌題だけあり)から「窓雨」までは、一丁分にあたるので、落丁によって生じたものであろう。

次の④⑤は、丹・書・竜・穂の各本に共通の欠如歌。次に本文をあげる。

④古郷草 露そちる波にあらさぬ磯の上かよふ都のおくのさゝ原

⑤夜尺教 しつかなる我むね分て出る月ふりさけみれば村雲のかけ

この二首のうち、④は巻三「古郷篠」(1719)と、⑤も巻三(1673)の同歌題の歌と一致する。①②同様、竜本系などに重出歌として削除したもので、元来は定本巻六に存した歌だろう。

⑥の「孤夢」を丹本で示すと

⑥孤夢 あとゝめてさむるか夢の中空にひとつのくもの残るをそみる

なからへて絶ぬる夢の浮はしをかけたれをの聲をつれなき

他^類の諸本では種本をのぞき、すべて、「あとゝめて」と「なからへて」の二首がある。穂・丹は一方を脱落したのであろう。

その他の個々の伝本の独自の欠如歌や重出歌を整理しておく。

内15本には、後述の「他本有之」を加算しても、「田家老翁」(2977)、「閑居木」(3057)、「閑中灯」(3065)、「冬鐘」(3144)、「阿弥陀の心を」(3226)を欠如している。このうち「草根抄」には「閑中灯」の抄出があるので、

この歌は原本にもあったことになる。他も、内15本の脱落歌とみてよからうか。その他、内15本では、「山、年をへて」が巻五内で重出し、「馴不逢恋、なをさりに」と「山、姿さへ」が、「他本に在之」にもでてきて重出している。

丹本は、「恨恋」のところが

うからすよみすしらぬよのよそ人になして思へハもとの身にして

恨恋 遠さかる身をうら風よたかくたてたか方による船もなき迄

となつている。「うからすよ」の歌は、諸本に存するので、丹本の単純な

脱落歌であらう。

竜本巻六は古写本の方だが、巻四のように次の二つの付箋歌がある。

①初恋 はてしらぬ恋路の末にむかふ身はたゝ一足も先そくるしき

②逢恋 よしさらはあくるもしらしとめかたき人をも身をもなきになしつゝ

この二首のうち、①は竜本または親本あたりの単純な脱落歌かもしれないが、②は巻二(985)に同歌が重出しているので、削除していたのである。そして、この付箋歌は、他本との比較で補充したものである。この「他本」とは、第9表の①②④⑤の補充がないので、島本系や内15本ではないと思う。この点は、巻四の付箋歌で推定したことに同じ結論である。

次に問題となるのは、内15本の恋部と経文部歌の末尾に各々みえる「他本に在之」の歌の性格である。これは内15本の巻五と同じである。但し、恋部は「他本に在之」の注記がないが、島本系の不完全類題形式のものと比較して、最後「寄月恋」におわらず、内15本では「初恋」以下十一首の歌があるので、これが「他本に在之」と近似の歌と推定したのである。経文部歌の末尾には「他本に在之」の注記のもとで、十二首ある。次に表示する。

第10表 (前半が恋部、後半は雑部、経文部歌。丹本の出所は示さない)

⑦	憑媒恋	つたふるも	③	旅宿禰覚	まところむも
⑥	憑媒恋	袖しほる	②	山寺	とらにのみ
⑤	見恋	忍ふれは	①	山	姿さへ
④	片恋	あはぬまを	⑪	寄衣恋	かよひこは
③	片恋	思川	⑩	馴不逢恋	なをさりに
②	聞恋	なかれての	⑨	欺無名恋	聞そうき
①	初恋	はてしらぬ	⑧	忘恋	すゑかけし

校合一本の巻五は、校異数36箇所のうち、穂本とすべて一致するとのことなので(=論文)、穂本系の本文と考えられる。

九、巻六について

巻六も、巻四、五同様、類題形式の巻で、恋・雑部の歌が収録されているが、末尾の数下に、詞書を伴った「経文部歌」がある。

巻六を所持する諸本は、丹・書・竜・穂・内15・島9・内18・内10・河野・松浦の十本である。ここで新しく河野本が登場してくる(松浦本は精査していない)。また「草根抄」には、巻六からの抜書があるので、原本の姿の一部を伝えるものとして諸々の点に援用できる。

巻四諸本間で一番顕著な相違は、配列に関する点で、完全類題形式と不完全類題形式とがある。諸本はこの両形にそって次のように二つに分別できる。

完全類題形式—丹・穂・書・竜の各伝本

不完全類題形式—内15・島9・内18・内10・河野・松浦の各本

この両形式の相違は、かつて検討したことがあるが、念のため恋部冒頭部分で示そう。

(不完全類題形式)(内15本)

- ① 初 恋 たきそむる
 - ② 逢 恋 吉野川
 - ③ 経年恋 かすしらす
 - ④ 待 恋 待わひぬ
 - ⑤ 別 恋 あかさりし
- … (14首略)
- ②① 初 恋 つゝめ先
 - ②② … かゝりきと
- … (10首略)
- ②③ 逢 恋 夢に猶

(完全類題形式)(書本)

- ① 初 恋 たきそむる
 - ② つゝめ先
 - ③ かゝりきと
 - ④ ふかからむ
- … (5首略)
- ①① 逢 恋 吉野川
 - ①② … 夢に猶
 - ①③ … 逢までは
- … (2首略)
- ①④ 経年恋 数しらす

この対比で、完全類題形式が、不完全類題形式で散在している同一歌題を、できるだけ一括せんとして成り立っていった過程が明瞭であろう。これは雑部でも同様である。原本・定本でも巻六は巻四、五と同じ不完全類題形式であったと思われ、竜本系の諸本は、後人の手による改編であろう。これは、「草根抄」の抜書状況(同歌題が幾首か間隔をおいてでくる)にても確実なところである。

次に二本以上に共通する欠如歌を表示する。

第9表

番号	歌 題	初 句	内15	丹	書	竜	穂	島 9	内18	内10	河野	一本
①	変 約 恋	うき雲の	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×
②	寄 冬 恋	枯て行	×	×	×	×	○	○	○	○	○	×
③	窓前竹 窓雨	(十三首)	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○
④	古 郷 草	露そちる	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×
⑤	夜 釈 教	しつかなる	○	×	×	×	○	○	○	○	○	×
⑥	孤 夢	あととめて	○	×	○	○	×	○	○	○	○	×

①は、「変約恋」で

うき雲のさハリをつくる月影に又ふりいつる袖のむら雨

の歌であるが、内15・島本系、それに河野本にみえる。この歌は、諸本の巻二に重出する(129-7)。従って、竜本系などは、重出歌に気付き削除したもので、元来、定本に存したものと思う。

②は「寄冬恋」で

枯て行人めハあさし年ふかくおもふ心のみちしはの霜

で、島本系と河野本のみにある。これも①と同様、巻三に「冬恋」(134-2)に同歌が重出するので、他の諸本は削除したものと思う。

③は、島本系の「窓前竹」から「窓雨」まで十三首の脱落。島9本でみる

歌がなかったことは確かである。その伝本は、素稿本や原本にあった「他本有之」の歌群をなんらかの理由で脱落させていたのか、あるいは、「他本有之」の歌群は、素稿本にはなく、編者あたりが後に補入した歌で、内15本の祖本は、そういった、素稿本の姿を伝えているのが、重要な問題として浮上してくる。内15本を「正徹自身の目を通った『草根集』原型を直接的に伝える系統の完本ではないか」とされる田中氏は、この問題に対して、

補入と考えるには些か困難な部分もあり、すなわち肯定はできない。

が一方、(内)本原本を春秋本の類からの脱落と考えることも困難である。わずか一巻で七十七首にもほる分散脱落は考えられない事、しかも他の巻々からみても(内)本がそれほど杜撰な本とは認められぬからである。(同論文)

と述べられ、「祖本からの脱落とは一概に言い切れない」とも考えられている。

もし、「他本有之」が、後の補入歌であれば、巻五の成立過程を知ろうえで貴重な示唆を提供するのであるが、現段階では、それを確認できる積極的な事実をつきとめていない。逆に、補入歌とみるのに支障をきたしそうな面がある。巻四、五、六の詠歌年代不記の巻が、ある年時の詠草が、ある歌群をなして配列されている可能性のあることは、すでに公表したが、「他本有之」の歌群が、ある年時の詠草とすれば、分散しているのは問題がある。ただ、各々の歌が、一つの歌題に二首以上ある所に位置しているのなれば、補入に際し、既出の歌題に一括したため分散したとも考えられるが、七十七首の中には、一首一題のものがかなりあり、後の補入歌なれば、現存巻五のごとき位置に配置する必然性が稀薄である(各歌の詠歌年時が確定しておれば、話は別であるが)。さらに、具体的な例をあげる。冬部の④「寒草霜」と⑤「落葉風」の二首は、ともに「永享五年詠草」と一致し、詠歌年時が判明する。「草根集」巻五でその位置をみる

と、その前後に「永享五年詠草」の歌が並列してでている。この事実を補入説の立場でみれば同じ年時で、同じ詠草にあるいくつかの歌が、一方は先にくりこまれ、④⑤などは、後の補入歌となっているという不自然さを感ずる。

以上のように、後の補入歌と考えるには不自然な事証がいくつか考えられる。私は、少なくとも、兼良に提出した定本では、「他本有之」の歌群は、竜本系や尊本の位置にあったと推定したい。ただ、そうすると、内15本の祖本などの欠如の線が強くなってるのであるが、田中氏もいわれるように、いわゆる単純な誤写による脱落現象とは考え難いので、その原因が判然としなくなる。このあたり、なお、今後の検討を必要とする。

諸本間には、四、五箇所、配列の相違もあるが、例の丹本などの後の移動と思われるので省略する。

以上の検討の範囲でも、書・竜・穂の近似性が窺え、丹本は、この竜本系に近い面をもちながらも、他本と混体していること、内15本・尊9本の独自性などが認定されよう。これは本文を比較しても確認できる関係である。内15本の独自異文、丹本の独自異文を若干示しておく。

① (226-8)	秋の月	月	月	月	月
② (229-2)	夢	川	川	川	川
③ (253-8)	川	空に冬をや	空に冬をや	空に冬をや	空に冬をや
④ (256-3)	空に冬をや	月かな	月かな	月影	月影
⑤ (265-10)	月かな				
(丹本)		(他本)			
① (232-8)	露のやと	宿の露	宿の露	宿の露	宿の露
② (257-1)	冬とても	冬とても	冬とても	冬とても	冬とても
③ (259-6)	山初冬(題)	山時雨	山時雨	山時雨	山時雨
④ (259-5)	枕上初冬(題)	枕上時雨	枕上時雨	枕上時雨	枕上時雨

①	庭草帯霜	冬の庭	252-9	⑩	夜時雨	降そめし	252-5	⑨	炭 窟	とことほに	251-8	⑧	月前雪	つれなくは	250-2	⑦	霜	ときは木の	250-4	⑥	椎 柴	山ふかみ	250-1	⑤	寒樹交松	枝ことに	249-1	④	落 葉	神 無月	248-7	③	冬 瀧	瀧の上の	247-3	②	冬 山	残る木は	247-5	①	炭 窟	山ふかく	247-8	⑳	霧	ふけぬるか	245-1	㉑	秋 獸	妻やまつ	242-9	㉒	田家搦衣	ひたかくる	241-1	㉓	月 契秋	あひにあふ	240-6	㉔	初 秋月	立そむる	240-8	㉕	暮秋紅葉	秋やこれ	240-9	㉖	“	月のすむ	240-5	㉗	月前搦衣	初霜の	240-4	㉘	秋 木	帰るさは	238-6	㉙	庭 紅葉	風わたる	237-1	㉚	露染山葉	紅葉ゝの	237-2
㉛	朝 霜	草の原	260-7	㉜	寒夜千鳥	千鳥なき	260-4	㉝	閑居初冬	我ならて	259-9	㉞	禁中神楽	みたれあふ	259-4	㉟	炉 火	冬はなと	258-1	㊱	杉 雪	日影さす	258-7	㊲	松 雪	立こむる	258-9	㊳	雪	ことし又	258-8	㊴	冬 月 牙	冬かれの	257-2	㊵	庭 寒 草	山と見し	257-3	㊶	落葉不待風	松陰や	256-5	㊷	月前落葉	をくれ月	256-7	㊸	時雨易過	村時雨	256-10	㊹	河 時 雨	しくれくる	256-9	㊺	夜 時 雨	さゆる夜の	256-8	㊻	冬 夜	埋火に	255-9	㊼	冬 暁 雲	明行や	255-10	㊽	炭 窟	峯の姿	255-1	㊾	網 代	かゝりたく	254-7	㊿	冬 里 月	木葉ちる	253-6	㊿	寒 樹 霜	いくとせそ	253-1	㊿	田 残 鴈	明わたる	252-5

㊿	冬 朝 雨	里わきて	264-6	㊿	嶺 時 雨	さしも草	264-5	㊿	寒 草 霜	くるす野や	263-8	㊿	歳 暮 雪	心なく	263-7	㊿	夕 松 霜	風さえて	262-6	㊿	時 雨	うきてたつ	262-9	㊿	夕 深 雪	いそき行	260-3	㊿	雪	ときは木の	260-8	㊿	袖 上 霜	かれし野の	260-8
㊿	枯 蘆	散はてゝ	266-7	㊿	初 冬 時 雨	さたまなく	266-2	㊿	冬 月	袖さゆる	265-8	㊿	遠 樹 深 雪	下折の	265-9	㊿	鳴 雪	から人の	265-5	㊿	落 葉 風	嵐 吹	264-2	㊿	惜 歳 暮	春をまつ	264-9	㊿	遠 山 炭 窟	尋ぬへし	264-7				

これによると追補歌の配列順序は、みごとに丹本の配列順に即っていることが確認できる。この巻五の配列は、竜本系・尊9本系でもほとんど異同がないので、いずれも内15本のいう「他本」に該当する可能性はある。竜本系にない「冬月」が「他本有之」の中にあるので、竜本系ではないようにも思われる。尊9本に近い本文を有するところがある(例えば、⑥「月前露」の初句「ちりそよく」は、尊9本と一致。丹本「鹿そよく」、書本「鹿そなく」)ので尊本系かと思うが、異文もある。内15本の「他本有之」の「他本」は、相当早い頃に存在した一本なので、現存伝本中には、全く同一のものはないのであろうが、丹・竜・尊の各本と大差のない伝本であったと思う。

ところで肝心なことは、内15本の「他本有之」の性格である。内15本の親本にこれらの歌が欠如していたので、内15本の書写者が他本をもって末尾に補充したのか、すでに内15本の親本にこのように補充してあったのか、内15本がそのまま書写したのか、そのあたりは判然としない。しかし、どの階梯にしろ、内15本巻五の祖本のある段階の伝本に、これらの和

したものである。おそらく、丹本の親本には、竜本のような本文欠損があったので、「海邊月」や「野徑月」の本文を補完するため、重出になることをもかまわず、同じ巻五の同歌題歌をもってあてたと推定される。かかる現象は、先述の巻四の「岡邊雉」でもみられたことで、丹本の姿は、定本の姿を伝えるものではなく、後人の作為による本文とみられる。丹本が、竜本系で不完全な②④⑤の各歌で、完全本文であるのは、他本を参照して補充したものであろうか。田中氏は、丹本を純粹寛文本でなく、他系統と接触したことがある寛文本と規定されたが(附論文)、この事例もその一証といえる。

その他、竜本系に共通の脱落歌に「冬月」(265-8)がある。これは三本ともに「冬月^{ホツキ}」と歌題はあるが、歌本文がない。尊9・丹の各本には存在するが、内15本では、後述する「他本有之」のなかにみえる。また、内15本には、次のような独自歌が、秋部の最後(「他本有之」の前)にある。

閑庭薄

花薄わか袖ひとつたのむとてはらへはうとし露の秋かせ

この歌は、他本の巻五にないだけでなく、現存する正徹の和歌資料にもみえない、内15本の独自歌である。秋部末尾にあるため、後の追加の可能性もあるが、正徹の歌と認めてよいのではなからうか。ただ、これが原本や定本にあったかいは、内15本の伝本の性格ともかかわるものなので、速断できない。内15本には、後述するように、「他本有之」の追補があるが、そこにもない欠如歌として「夜落葉」(248-5)、「霞」(266-6)の二首がある。

尊9本には、秋部のはじめに、一丁の錯簡があるほか、「月前鈴虫」(236-3)の歌が初句だけで、下部が欠如しているという欠陥がある。しかし、「月前鈴虫」の歌は、その所に後人が付箋で完全な本文を追加している。冬部巻末にも、本文と別筆で

氷

氷るらし八十うち人によるひほをよそにうらみぬハしひめの袖とあり、更に同筆で「氷室題氷魚敷」として同歌を付箋に記している。これは、田中氏の指摘にもあるように、巻十四(下176-8)の歌である(附論文)。おそらく、この歌は巻五に本来あったものではなく、なんらかの理由で巻末に後人が書き加えたものであろう。その他、「古郷露」(242-9)の歌の下に「七ニアリ」との注記が注意される。この歌は、注記のように、巻七にも重出する。現在、尊6・尊9の各本には巻七が存在しないが、当初は巻七も備っていたことを示している。

さて、巻五の歌の出入りで、最も重要な問題は、内15本における「他本有之」の歌の性格認定である。秋部末尾に半丁の余白のあと「他本有之」と注して、二十七首、冬部末尾には、余白はないが「他本有之」として、五十首、合計七十七首の歌が掲載されている。この七十七首は、竜本系や尊本など、他の諸本の所定の所に欠如しているものである。煩瑣ではあるが、次に七十七首の歌題・初句・丹本での出所を表示しておく。

第8表 (前半が秋部、後半が冬部)

⑧	初秋風	篠わくる	229-3	⑩	田上稻妻	秋の田の	236-6
⑦	秋雨	晴ぬへき	229-9	⑪	遠村秋夕	夕うき	236-5
⑥	月前露	ちりそよく	228-7	⑫	初秋山	はらふなよ	235-2
⑤	早秋	都にも	227-5	⑬	初秋雲	夕日影	235-5
④	立秋風	秋もけさ	227-6	⑭	山月	夜半の月	234-1
③	初鴈	いつくにも	227-9	⑮	垣権	あら垣の	232-6
②	萩露	秋萩の	227-1	⑯	古郷露	たか世より	231-7
①	七夕濱	たきそめよ	225-3	⑰	田上鴈	くる鴈は	231-3

山かつの宿^一(222-2)と本文誤脱のあるところが、尊9本では「夕かほの花も散うせぬ」と補完するなど、若干の相違はある。さらに尊本は、配例などの面でも、島本系と近いが、本文でも、両本は独自異文をもつものがある。うち数例を掲載しておく。

(尊本・島本系)

- ① (187-9) 霞
- ② (210-6) 入江にあそぶ
- ③ (214-2) 陰たのむらん
- ④ (215-6) 待ころの

(他本)

- 衣
- あしまにすたつ
- 陰をたのまん
- 此ころや

一方、内15本は、巻四でも独自の欠如歌があり、配列も他本と異なる面があり、本文にも独自異文が多く、同系統本がない。

残りの竜・書・穂および丹の各本の関係は先に触れるところがあつたので略す。

八、巻五について

巻五は、巻四同様、類題形式で巻四の春、夏にひき続き、秋、冬部の歌が収録されている。この巻を所持する伝本は、わずかに、丹・穂・書・竜・内15・尊9の六本である。これは「草根集」全十五巻のうち、伝本が最も少ない巻である。それだけに、伝本間には、後述する内15本の特異な「他本有之」の追補歌以外には、顕著な相違は認められない。

まず、例によって、歌の出入りからはじめる。第一に問題となるのは、竜・書・穂の各本に共通してみえる不完全な本文の和歌群である。次に竜本で該当箇所を示す。

海邊月

- ① いたつらに奥の小嶋の濱ひさし^{本マ、}

槿花

- ② 身そあらぬ秋の日影の^{本マ、}

野徑月

- ③ あさち原たかせ

月前聞鹿

- ④ みねこゆる影にむかひて鹿^{本マ、}

杜紅葉

- ⑤ をのか毛の色になかしそまとりすむうなての杜の秋そ^{本マ、}

(243-7-1)

この五首の不完全本文は、書・穂の各本にも全くそのまま共通しており、三本の同系統を示す顕著な事例といえる。一方、内15・尊9の各本は、五首ともに完全本文であるので、尊9本で、欠損部分の本文を補充しておく。

①さしいる月の光許や、②日にそへてよハれハつよき槿の花、③に分しみち芝に忘れす月の跡したふらん、④そなく月の都に妻やこふらむ、⑤もみちは

竜本系のこの欠損部分は、すでに親本に虫損や破損があつたために生じたものであろう。ちょうど欠損本文の部分をたどると、ヤマ型のカーブを描く。この箇所で奇妙なのは丹本である。次に版本のまま翻刻してみる。

①海邊月

いたつらにおきの小しまの濱ひさし入月の光とは、や^本
わたつ海の千尋の底にかつても月をみるめの影は曇らし

②槿花

身そあらぬ秋の日影の日にそへてよわれハつよき槿の花^本
道しはにわすれす月のあとしたふらん

③野徑月

浅ち原たかせに分し人そあらん月に夜わたれす、の下風

④「月前聞鹿」、⑤「杜紅葉」は、共に尊9本と同じ完全本文)
①の歌が、尊9本などにくらべ、丹本では別個の歌になっているが、これは、同じ巻五の「海邊月」(234-6)と重出している。また、③は三句以下が、全く別の歌句になっているが、これも巻五の「野徑月、露ふかし明なはわくる人そあらん月に夜わたれす、の下風」(234-3)の下部本文をつぎた

例外として、次の二箇所注記がある。

①子日松 春はけふきのえ子の日にあひて松も千年の初とそしる

正月一日今日甲子の日なり (2067)

②夜螢 まよふへき心のやみもしらすとやよるの螢の身を照すらむ

此哥二条公螢の哥有如何尋之 (2084)

①はどの諸本にもあり、多分、正徹の手になる注記であろうが、②は内容からみて後人の注記である。これは、穂本と丹本のみにみえるので、両本の接触が示唆される。

ここで、これまでの諸巻で、かなり近似した性格をもっていた書・竜・穂、それにやや離れる丹の各本の関係に言及しておく。田中氏は、巻四の検討から、付箋歌のない竜本は、重出歌を削除しようとした整理本であること、こうして一度整理されていた竜本に、後になって再び未整理本を参看して付箋歌がはられた。その結果、以下の書・穂・丹の各本において本文化して重出を新生又は再生されることとなったと推定され、諸点も加味して、竜本↓書本↓穂本↓丹本という本文移行を結論付けられた(附論文)。

付箋歌のない巻四の竜本が、重出歌を削除した整理本であったことは確実であろうが、「再び未整理本参看」したという「未整理本」とは、どの系統の伝本であろうか。まず、それには、春部末尾に「野雲雀(二首)、夏部末尾に「五月雨(大空も)があるという二つの条件をみたした伝本でなければならぬ。それに該当するのは、書・穂しかない(もし、尊本や島本系を参看したのなら、「岸上藤」が付箋歌になってもよいし、夏部末尾が「夕顔」なので、竜本のようにはならないであろう)。しかし、田中氏の想定のように、書・穂が竜本の下位に位置するとすれば、竜本が書・穂本などを参看して付箋歌を追捕したとの考えは成立しない。よって、現存伝本には該当するものがない。確かに竜本の付箋歌を本文化して書写すれば書本の姿になる。現にこの二本は、親子関係のごとく本文異同もほとん

どなく、文字の宛方も同じ傾向にあるので、竜↓書の可能性はありうる。ただ、先のように、竜本に付箋歌をつけたときの現存伝本がないとすれば、竜本より先行する書本や穂本系の親本の想定も一応考えてみなければならぬ。また、書・穂などには、竜本にない「田若菜(第7表参照)(重出歌の前者)がみえるのも竜↓書のケースでは、不都合で気にかかる。田中氏の想定のように、竜↓書であるか、別に両本は直接交渉はなく、共に、共通の親本と関連すると考えるか、今後の検討にまちたい。ただ、竜・書・穂・丹の各本は、ある一つの祖本から派生していることは確かで、いくつかの段階をへたり、他本との接触をへて、現在のような若干の差がでてきたことはいえると思う。

以上、種々の角度から検討を加えてきたが、最後に本文なども参照して諸本の位置をまとめたい。

まず、卷三同様、島9・内18・内10・内4の島本系は、この巻でも同系統なることは、脱落歌・配列異同からみても納得できる。念のため、島本系の独自異文を数例あげておく。

- | | | |
|-----------|---------|---------------|
| ① (1865) | あはて | あかて(丹)・ありて(他) |
| ② (1867) | 春哉 | 山哉 |
| ③ (1903) | 春夕雨(歌題) | 夕春雨 |
| ④ (19710) | 浪哉 | 春哉 |
| ⑤ (1988) | 夕ま暮かな | 夕くれの雨 |

次に、尊9本は、尊6本を親本にすると思うが、この両本を比較すると、尊9本は漢字の宛て方にいたるまで、尊6本をできるだけ忠実に書写している。これは尊6本になくて、尊9本のみ現存する諸巻の書写態度にも通ずると考えられるので、尊6本の復元にとって、尊9本の存在意義は大きい。但し、例えば、尊6本で「夕かほの散うせぬ松のかき青葉ひまある

⑥納涼	六月の	杜蟬	鳴蟬の	山中餘花	夏衣
⑦ "	たちよらむ	首夏	花もまた	早苗	さをとめか
⑧ "	むすふまの	"	行春の	"	数おほき
⑨首夏	花もまた	首夏山	いまよりの	"	旅行は
⑩ "	行春の	納涼	六月の	虚橋近砌	人すます
⑪首夏山	いまよりの	"	たちよらむ	五月雨	さみたれの
⑫新樹	夏草の	"	むすふまの	"	今は又
⑬山中餘花	夏衣	"	△夏衣	曳菖蒲	今は又
⑭早苗	さをとめか	"	△涼しきは	夏草	しけるらし
⑮ "	数おほき	新樹	夏草の	瞿麦露	哀にも
⑯ "	旅ゆけは	山中餘花	夏衣	新樹	夏草の
⑰虚橋通砌	人すます	早苗	さをとめの	首夏	花もまた
⑱曳菖蒲	今は又	"	数おほき	"	行春の
⑲五月雨	さみたれの	"	旅ゆけは	首夏山	今よりの
⑳ "	五月雨は	虚橋通砌	人すます	納涼	六月の
㉑夏草	しける覽	五月雨	五月雨の	"	立よらむ
㉒納涼	△夏衣	"	さみたれば	"	結ふまの
㉓ "	△すしきは	曳菖蒲	いまは又	"	夏衣
㉔瞿麦露	あはれにも	夏草	しけるらし	"	涼しきは
㉕夏月易明	うたゝねの	瞿麦露	あはれにも	杜蟬	鳴蟬の
㉖夕顔	●里つゝく	夏月易明	うたゝねの	夏月易明	うたゝねの
(島9本「裁花」の歌あり)		○蟬聞聲	鳴つくす	間蟬聲	鳴つくす
		○五月雨	ふる日をは	五月雨	ふる日をは
		○ "	大空も		
		(竜本「大空も」は付箋歌)			

この三つを対比することで、異同のおこった過程をある程度推定できる。上段と中段の相違は、②⑥と②⑨を先と同歌題のところに一括したために生じた程度(そのため「納涼」の位置が少し移動)で、大差はない。中段末

尾の「蟬聞聲」、「五月雨」は、上段の諸本では、それ以前に既出しているものである。中段と下段は、一見大きく相違しているようであるが、「山中餘花」→「瞿麦露」と「首夏」→「納涼(涼しきは)」が、各半丁分で前後したために生じたものではなからうか(但し、そうすると「新樹」と「杜蟬」の歌が換置している点が疑問として残るが)。
 以上のように、夏部の定本の姿は、冒頭に十二首がなく、それが中央部にあり、末尾は、上段に比較的近いものではなかったかと考えられる。
 夏部末尾の配列の乱れのほかに、巻四では例えば、丹本と尊本と比較すると

(丹本)		(尊6本)	
柳	立ならふ	柳	たちならふ
春曙	花に月	梅交松芳	住吉の
	頃はまた	春曙	花に月
梅交松芳	住よしの		頃はまた
帰雁	燕くる	帰雁	つはめくる
(三首略)	風ふけは		みこしちに
帰雁	みこしちに		風吹は

のような、歌の移動あるものが六箇所、
 帰雁 燕くる 帰雁 つはめくる
 (三首略) 風ふけは 風吹は
 帰雁 みこしちに
 のように、同じ移動でも、同歌で一括化したものが四箇所みえる。この配列の異同を、内15本や島本系にあたってみると、ほぼ尊本と同じである。竜本系では、前者は丹本と同じだが、後者の四箇所は、尊本と同じ配列である。一見、歌題の一括化ということで、後者の四箇所は、丹本が原本・定本の姿をとどめているかに思われるが、同系統につらなる、竜本系が原本・丹本と同じでは、これも丹本だけの後人の手になる移動の可能性の方が強い。

さて、巻四は歌題と和歌のみの類題形式の巻であるが、丹本などには、

るのに気付かず不用意に付箋歌にしたためであろう。春部の末尾の歌を諸本と比較すると、次の相違がある。

①	惜花、とまらぬ	(書・穂)
②	” 又あはん	
③	田若菜、みし秋の	
④	梅移袖、やと出て	
⑤	野雲雀、野への床	
⑥	” 妻こめし	

①	付箋歌	(竜)
②	”	
③	”	
④	”	
⑤	”	
⑥	”	

①	付箋歌	(丹)
②	”	
③	”	
④	”	
⑤	”	
⑥	”	

①	付箋歌	(尊)
②	”	
③	”	
④	”	
⑤	”	
⑥	”	

①	付箋歌	(内15)
②	”	

諸本に①②の歌があるのは問題ないが、③④⑤⑥の四首が疑問である。この四首は、内15本など、諸本によっては、巻四の巻末以前に掲載されているものである。この関係を整理すると第7表となる。

第7表 (上段が別箇所、下段が春部末尾)

諸本	歌題			
	田若菜	梅移袖	野雲雀	野雲雀
書・穂	○	×	○	○
竜	×	×	○	○
丹	○	×	○	○
尊・島	○	○	×	×
内15	○	○	○	○

書・穂	○	○	○	○
竜	○	○	○	○
丹	○	○	○	○
尊・島	×	×	×	×
内15	×	×	×	×

第7表で重出現象をみないのは、内15・尊・島9・竜の各伝本であるが、竜本は先述の通り整理本なので、内15本か尊・島本あたりが、定本の姿を伝えているように思う。「野雲雀」の二首が、内15本の位置にあるのが定本の姿か、尊・島本のように末尾にあるのが本来か、速断できない。内15

本でいえば、「野雲雀」の次に「野逕雲雀」が位置しているので、雲雀の歌をここに一括したとも考えられ、逆に同じような歌題があるので、書写の際、目移りして「野雲雀」を誤脱し、後で気付いて末尾に追補したとも考えられるからである。但し、「田若菜」や「梅移袖」は、本来、内15・尊・島各本の位置にあり、竜本系は、それを脱落して、末尾に補ったとみたい。

次に夏部を検討する。夏部では、まず、冒頭に「五月雨晴」(207.9)以下「薄暮水難」(207.1)までの十二首があるものと、この十二首が、冒頭でなく「夏月」(219.2)と「罌麥露」(219.1)の間にてくるもの、および両方に重出しているもの三ケースの諸本に分れる。書・穂は、冒頭と中央部に重出、丹本は冒頭のみ、他本は中央部にのみある(但し、書本はこの十二首が「夏部、次第不同」の題号の前にあり、穂・丹は後にある)。この点に関して、田中氏は

本来、竜本のように中央部にあったこの十二首(二丁分)がなにかの手違いで冒頭の前面にも置かれ(書)、これを継承して本文化してしま(穂)、やがて重出に気付いて中央部の方を切り捨て整理してしま(丹)、跡が歴然としている。(附論文)と推定されている。

また、夏部では、末尾部分に諸本間に著しい配列異同がある。すでに田中氏も二度にわたって掲載し、検討を加えられているので重複するのであるが、論述上、必要なので、大きく三つに分けて表示しておきたい。

①	夕顔	しつかやそ	夕顔	朧か屋そ
②	”	夕かほの	”	夕顔の
③	杜蟬	永日の	”	●里つゝく
④	”	まとりすむ	杜蟬	長き日の
⑤	”	鳴蟬の	”	まとりすむ

			夕顔	朧か屋そ
			”	夕顔の
			”	里つゝく
			杜蟬	長き日の
			”	まとりすむ

卷七の宝徳元年正月廿四日の条にみえ、書本では、紙片に書きこまれて巻九にはさみこまれて浮動状態にある。なぜ、かかる奇妙な現象が生じたのであろう。このことに関して田中氏(の論文)は、巻一の

岸 藤

松にはふ末の世とをくさかふ也南の岸の北の藤浪

と下句が一致するため、重出歌と錯覚し、巻四から削除した整理本をもって書写し、後に他本にこの歌のあるのに気付き、付箋に書いていたものが、巻九、あるいは巻七にまぎれて、本文文化(巻七の場合)したと考えられている。従って、③の歌は本来、巻四にあったもので、巻七や九の歌ではないであろう。④⑤は、丹・穂の脱落であろう。特に⑤は、二十首の脱落で、おそらく一丁分にあたる。この二十首の欠如は、版本丹本の最大の欠陥といわねばならない。

その他の各伝本の独自の欠如歌を指摘しておく。内15本には、「待山花」(184-8)、「山霞」(187-3)、「曳菖蒲」(217-9)などが欠如している(但し、田中氏が「納涼」から「夏草」までの十五首欠とされたのは(の論文)、一丁の内側にその該当部分を綴じ込んだためで、内15本には存在することを申しそえておく)。穂本には「曉月春静」(194-6)が歌題のみあって、歌本文が欠如。穂本には他に歌題のみ欠如しているものが若干みえる。島9本では「夏木」(221-10)を欠き、「栽花」(191-8)は諸本の所定の所になく、巻末に追補している。内10本には「春雪」がない。丹本は、「岡辺雉」(188-1)の歌が

子を思ふ道のさ、原岡越にたれふみたて、き、すなくらむ
であるが、諸本は

子をおもふき、す鳴也かの岡に草かるおのこはるなくもかな、
で別の歌である。これは、丹本がよった穂本系が「はるなくもかな」を欠いているので、より完全な同題の歌でうめるため、同巻(193-6)の歌をもって補充したために生じたのではなからうか。従って、丹本では、「子を思

ふ道のさ、原」の歌は、巻四内の重出歌となっている。丹本のかかる改訂は他にも例がある。

ところで、尊6・尊9本の巻四には、歌の右肩に、記号を付した歌が次のように八首ある。これはかつて考証したように、「草根集」内の重出歌記号と考えられる。但し、②と⑤は、下句など的一致から重出と錯覚したものであろう(なお、田中氏(の論文参照))。

- | | | | |
|-------|------------|--------|-----------|
| ① 梅薫風 | なへて世の(巻十四) | ⑤ 岸上藤 | さきしより(巻二) |
| ② 霞 | 海山を(巻十四) | ⑥ 初春霞 | 夜をこめて(巻二) |
| ③ 春曉月 | 面影の(巻十四) | ⑦ 春洞霞 | 跡ふるき(巻三) |
| ④ 山霞 | 天の戸の(巻二) | ⑧ 古屋春雨 | すきぬるか(巻三) |
- (初句の下巻名は、重出歌のある巻。※は、下句一致の歌のある巻)

この尊本の重出歌記号と関連するものに、竜本の付箋歌がある。この付箋歌は、原本の竜本に欠如している歌を、他の諸本を参照し、その場所に補入した性格のものと思うが、次のように、春部に九首、夏部に一首ある。

- | | | | |
|--------|-------|---------|-------|
| ① 梅薫風 | なへてよの | ② 春洞霞 | 跡ふるき |
| ③ 霞 | 海山を | ④ 古屋春雨 | すきぬるか |
| ⑤ 霞中春雪 | 春のきる | ⑥ 野雲雀 | 野への床 |
| ⑦ 山霞 | あまのとの | ⑧ (野雲雀) | 妻こめし |
| ⑨ 初春霞 | 夜をこめて | ⑩ (五月雨) | 大空も |

先掲の尊本の重出記号歌と比較すると、①||①、②||②、③||④、④||⑥、⑤||⑦、⑥||⑧と六首も一致する。この事実は、竜本(古写本の方)の親本が、重出歌をできるだけ削除した整理本であったことを推測せしめる(但し、他にも重出歌があるので完全をきしてはいない)。そこで、問題は、⑦⑧⑨の四首だが、⑦は竜本の単純な脱落による補充であろう。⑧⑨は、竜本では、巻四にすでに掲載され重出歌となる。これは、春部、夏部の末尾に、⑦⑧と⑨のある他本と比較し、すでにこれらの歌がで

⑩ (144-6) 時雨の(丹)
 ⑪ (145-9) 涙と(内) 丹

時雨や
あはに

時雨や
あはに

異同は、ここに掲載した以外にも若干あるが、これだけでも、ある傾向をつかめる。即ち、内15本は独自異文が多く、八つのうち、「永享五年詠草」と一致するのは、⑩の一つだけ。次に丹本は、独自異文七つのうち、⑩⑪の二つが一致。両本ともに「永享五年詠草」から離れている。十七箇所のうち、「永享五年詠草」の本文と一致する箇所が多い伝本から順にあげると、尊・書・島1が十三、島9が十二、丹本が十一、内15は八である。「永享五年詠草」が自筆本の面影を忠実に伝えているとすれば、この部分に限っては、尊・書・島1・島9の各本あたりが、原本の本文を伝え、丹・内15の各本は少しはなれているとも考えられる。但し、これは「永享五年詠草」が自筆本を忠実に書写しているとの前提にたっていることなので、断定はできない。一つの示唆的な事例とはなる。

以上、巻三に関して、種々の観点から分析を加えてきたが、現存伝本中、最も多い巻であることや、所々に問題もあって、かなり煩瑣になった。各伝本間の位置をまとめてみると、ほぼ次のようになるうか。

内15本は他に同系統本なく、独自性が強い。穂・金と書・竜の両グループが近く、さらに四本も関連を持つ。島9・内18・内10・内4は、同一系統であり、本文的には、尊9本に近い面をもつ。但し、その直流にたつものではない。零本三本も同じ系統で、本文的には、尊9本に近い。校合一本は、穂本系に近い面もあるが、島本系の独自異文と一致するもののあることが留意される。

七、巻四について

巻四は、定数歌や日次形式の詠草でなく、類題形式の巻である。この形式は巻五、六も同様である。巻四は春部・夏部を収める。但し、完全類題

形式ではなく、ある歌題が、同じ巻のなかに所々に散在することが多い。これは、ある特定の年時の詠草が一つのまとまりをもって掲載されたために生じた現象であろうことは、すでに考証してきたところである。

巻四を所持する伝本は、丹・穂・書・竜・内15・尊6・尊9・島9・内18・内10・内4の十一本である。ここで、現存最古写本の尊6本が初めて姿をみせるが、これを尊9本と比較すれば、尊9本が親本をどの程度忠実に書写しているかが窺える。また、これまでの竜本は、新写本の方であったが、この巻四は古写本の方である。これを検討すれば、新写本の方との本文関係が推定できよう。その他、「永享五年詠草」、「永享九年詠草」の中で、巻四の詠歌と一致する歌が幾首かあるので、本文上参照できる。まず、二本以上に共通する歌の出入りを整理して第6表を作成した(同巻内の重出歌の出入りは除外)。

第6表

番号	所在	歌題	初句	内15	丹	書	竜	穂	尊6	尊9	島9	内18	内10	内4	一本
①	188-8	霞添山色	浅緑	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②	188-7	霞添山色	天地や	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③	189-8 7	岸上藤	咲しより	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④	198-5 6	夕苗代	白妙に	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤	203-3 4	梅交松 河敷冬	(20首分)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

①②は島本系の共通の欠如歌であり、この巻四でも、同一系統であることが暗示されている。③は、

岸上藤

咲しより寺と家とや栄けん南のきしのきたの藤なみの歌だが、竜本系と丹本に共通欠如している。この歌は、丹本と穂本では

〔他本は「月次三首」〕などは、零本系の独自異文なので、一応、沢庵本も零本系の可能性がある。但し、冒頭の「天津空」の歌が、零本系では「恵みあまねき法のホマ」と「雨」が欠字になっているが、沢庵本には「雨」があるし、書写形式も相違しているもので、同一系と断言はできない。さて、内15本は、この巻三でも独自異文が目立つ。若干、掲載してみる。

- (内15本)
- ① (132-4) 淡雪
 - ② (136-7) 山里
 - ③ (136-7) 春
 - ④ (139-5) かへすな
 - ⑤ (168-8) 其比
 - ⑥ (172-5) こぬやとりかな
- (他本)
- 白雪
 - 山つと
 - 蛭
 - かこつな
 - 當初
 - とはぬ宿哉

最後に、校合一本に触れておく。田中氏の調査では、一一六箇所の校異数のうち、内15本と52%、島9本と56%、書本と56%、穂本と66%の一致率になるという。この比率は、ほぼ巻二と同じである。比較的に穂本に近いということになるが、ただ、次に若干の例を示すように、島本系の本文と一致する異文のかなりみえる点がかかる。

- (島本系と一本)
- ① (134-10) 義有
 - ② (136-2) 花も
 - ③ (137-8) みるからに
 - ④ (138-10) 浪に
 - ⑤ (145-2) さ衣
 - ⑥ (147-10) 千とせ
 - ⑦ (148-1) 初春霞(歌題)
 - ⑧ (150-6) 神に
- (他本)
- 茂有
 - 花そ
 - みるかたそ(丹)・みるからそ(他)
 - 浪も
 - は衣
 - 千世を
 - 初春雪
 - 神の

かかる例は他にもあるが、これは校合一本の本文が、単純に穂本系だけの本文ではなく、島本系の本文をも有していたことを示す。これは一本が、両系統の混体本文であったことを示すのか、校合一本とは、この巻三に關しては、二系統の本を同時に校合したことによるのか、にわかに判定できない。

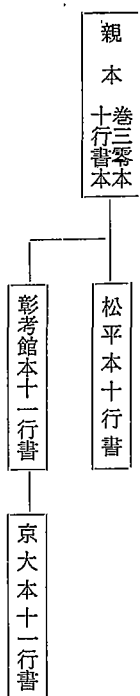
ところで、巻三のうち、永享五年の詠草に關しては、別に、正徹自筆本をもって書写したとの奥付をもつ「永享五年正徹詠草」(天理図書館蔵)があり、「草根集」巻三との間には七十余首の一致歌があるので、その歌に限り諸本の本文を比較できる。今、内15・丹・書・尊・島9・島1の各本を代表にして、「永享五年詠草」の一致歌と校合してみる。「永享五年詠草」の独自異文は除き、そのうち、いくつかの異同を対比すると次のようになる。

- (独自異文の伝本)
- ① (132-9) しほも(内)
 - ② (133-4) 庵たにも(内)
 - ③ (133-9) 梅(丹)
 - ④ (133-2) のみして(尊・島9)
 - ⑤ (133-1) すれや(丹)
 - ⑥ (134-5) 後も(内)
 - ⑦ (135-4) 道(丹)
 - ⑧ (135-10) まよふ(丹)
 - ⑨ (135-10) 色(内)
 - ⑩ (135-10) いひなして(丹)
 - ⑪ (136-7) 山里(内)
 - ⑫ (136-6) ちりも(内)
 - ⑬ (138-10) 浪に(島9)
 - ⑭ (138-8) みるらん(内)
 - ⑮ (144-6) 色そかし(書)
- (他本)
- しほは
 - 庵たに
 - 梅
 - のこして
 - すれや
 - 後に
 - 歌
 - まかふ
 - 物
 - いひなしそ
 - 山つと
 - ちりを
 - 浪も
 - みさらん
 - 色そめし
- (永享五年詠草)
- しほは
 - いはりたに
 - 梅
 - のこして
 - すれや
 - 後に
 - 歌
 - まかふ
 - 物
 - いひなして
 - 山ざと
 - ちりを
 - 浪も
 - みさらん
 - 色そめし

尊9本系と全く同一系統にくくるのは危険である。少なくとも、尊9本の独自歌二首を掲載していないことから、尊9本の直流には位置しないことはいえる。

次に零本系三本であるが、これは第5表で①の独自の脱落があるほか、先述の配列異同の共通性、歌題を前に一括して、後に歌本文を記す特異な書写形式などからみても、同一系統であることが予測される。また、永享六年三月十四日の「山家灯」(152.8)の歌から「山納涼」(153.1)までの三つの詞書を含む和歌十首が、所定のところ欠如し、その後しばらくして現われる点も共通する。これは親本における錯簡をそのまま継承したために生じたもので、現存零本では、必ずしも丁数の変り目にあたっていない。以上のように、この零本三本は同系統とみてよく、本文でもこのことはいえる。ただ、京本には、さらに「冬恋」(134.2)の歌を欠如したり、永享五年十一月十二日の「江上暮春」(146.8)の歌の上部とその後にてくる「住よしの松のためしに」の歌の下旬を混合したりして、本文に乱れがある。「春月」(133.2)、「山家恋」(137.7)なども書き入れ歌としている。

この零本系三本の相互関係に対して田中氏は、京本がその書写形式面からみて親本の下位本とされ、



とされたが(論文)、いかがであろう。島1本の十行書に着目され、これと巻九の零本系親本の十行書とを関係付けられて「親本十行書」を想定されたのであるが、島1本は、同じ十行書でも、和歌一首を二行書に書写しており、巻九零本系の和歌一首一行書とは必ずしも結びつかない。先に触れた「山家灯」から「山納涼」までの錯簡は、親本(または祖本)の一丁

分にあたると思うが、島1本の書写形式では、うまく一丁におさまらない。従って、親本や祖本が島1本のような十行書であったとは必ずしもいえない。また、京本が彰本の下位に位置するとは必ずしもいえない。彰本には「春月」が書き込みになっている点など、京本に近似した面もあるが、京本にある歌の右肩の記号は彰本にみられない。この記号は、京本が後に記したものでなく、島1本にもみえるので親本あたりに存したものであると思う。京本と島1本の記号の歌を抽出してみる。

(京本)

- ① (134.5) 落梅、吹のほる
- ② (134.8) 故郷梅、なにはかた
- ③ (149.3) 行路柳、里とほみ
- ④ (168.4) 梅蕉庭、咲梅の
- ⑤ (169.1) 梅花薰砌、やとの梅
- ⑥ (170.9) 梅花盛開、梅かゝに

(島1本)

- ① 落梅、吹のほる
- ② 古郷梅、なにはかた
- ③ 行路柳、里とほみ
- ④ 門柳、色かへぬ (151.7)
- ⑤ 柳似煙、朝霞 (157.8)
- ⑥ 梅蕉庭、さく梅の
- ⑦ 梅花薰砌、やとの梅

両本を比較すると、京本には、島1本の⑦⑧がなく、逆に島1本には京本の⑥がない。互に書写に際して直接交渉があれば、かかる現象を呈しないであろう。また、京本が彰本の下位にあっては、かかる記号を付すことはないで、この考えは成立しがたい。巻三の零本三本は、共通の祖本から書写した転写本であることは確かであるが、互に親子関係という直接交渉はない。本文は、島本系と尊9本のうち、田中氏のいわれるように、尊9本に近い面がある(論文)。但し、尊9本の独自歌や錯簡もなく、尊9本の下位にたつものではなからう。

沢庵本も同じ零本であるが、未調査なのでその位置が確認できない。ただ「松井子爵家御藏品入札」目録に冒頭部分の写真があるので諸本と比較できる。「試筆に」(131.1)(他本は「試筆とて」)、「月次の三首に」(132.8)

(丹本)

- ① 十日海印寺の僧正伴ひて……
- ② 去年もかく命あらはと……
- ③ それより吉峯の花を見侍りて
まよふへき物とはみえず……
- ④ 岩藏にて
- ⑤ 櫻花咲てはちらぬ……
- ⑥ 大原野へたつて……
- ⑦ 吹しをる嵐も雨に……
- ⑧ 蓮花寿院にて……
- ⑨ 都よりなとふ人の……

(諸本) (代表尊9本)

- ① 十日海印寺の僧正ともなひて……
- ② 去年もかく命あらはと……
- ③ それより吉峯の花を見^侍て
まかふへき物とはみえず……
- ④ 蓮花寿院にて……
- ⑤ 都よりなと問人の……
- ⑥ 岩藏にて
- ⑦ 櫻はなさきてはちらぬ……
- ⑧ 大原野へゆふつけて……
- ⑨ 吹しほるあらしも雨に……

この対比で明らかのように、丹本の⑤の歌と詞書は、そのまま諸本では②の歌の次に位置する。因に「永享五年詠草」にもこの部分が存するが、ここでは、諸本のように「蓮花寿院云々」の詞書は、②の歌の次に位置するが、続いて③の歌がくる。これは、⑥の歌と「岩藏にて」の詞書を脱落したためであろう。しかし、「蓮花寿院云々」が③④より前に位置することは諸本と同様である。丹本の配列は書写過程での誤写であろう。

その他、零本系では「寄風恋」(142-9)と「隣里鶏」(142-8)の配列が諸本と逆順になっているが、これも諸本の方がよいだろう。

さて、このあたりで、以上の調査をふまえて、これに本文異同を考慮して、各伝本相互の関係を論じておきたい。

第5表によって、書・竜の関係、穂・金の関係が各々近いことは首肯されるが、これは本文面でもいえる。また、この四本は、詞書の③④⑤を共に欠くなど、他本と比較して近い関係にあるとみてよい(便宜的に、この四本を竜本系と呼ぶことあり)。

次に、新しく顔をだした伝本、島9・内18・内10・内4と零本系の性格が注目される。結論を先にいえば、島9・内18・内10・内4は、第5表で

も⑥⑦⑨の追補歌を除き、すべて一致するように、同一系統とみてよい。なかでも、内18・内10・内4は近く、親子関係にたつものもあろう(便宜的に、この四本を島本系と呼ぶことあり)。島本系の四本が同系統なることは、本文面でも異同が極めて少ないという事実からもいえるし、次に数例示すような島本系の独自異文からも納得できよう。

- | | | |
|------------|-------|-----|
| ① (136-2) | 花も | 島本系 |
| ② (137-8) | みるからに | |
| ③ (138-10) | 浪に | |
| ④ (145-2) | さ衣 | |
| ⑤ (147-10) | 千とせ | |
| ⑥ (150-6) | 神に | |
-
- | | |
|-------------------|----|
| 花そ | 他本 |
| みるかたそ(丹)・みるからそ(他) | |
| 浪も | |
| は衣 | |
| 千世を | |
| 神の | |

この島本系は、いわゆる竜本系、内15本・尊9本のうち、いずれに近い位置にあるか。第5表からみて、③④の詞書をもち、②⑤の歌も存するので、竜本系(特に穂・金)ではないことが予測される。また、内15本よりも、尊9本に近い本文であることは、次に数例あげるような、島本系と尊9本(但し、零本に一致するものあり)に共通する異文の存在することである。

- | | | |
|------------|-------|---------|
| ① (137-3) | 白雲 | 島本系・尊9本 |
| ② (164-10) | 袖 | |
| ③ (164-8) | 月日 | |
| ④ (165-10) | さゝかにの | |
-
- | | |
|-------|----|
| 横雲 | 他本 |
| 露 | |
| 心 | |
| さらにかく | |
- (但し、②③④は、零本系とは一致する)

しかし、島本系には、他本にみえない独自異文も相当数あり、また、尊9本の独自歌③④や例の大きな巻十一との錯簡などを継承していないので、

この歌群の存するのは、丹本の他には、内18・内10・内4の諸本である。但し、丹本以外には、「畠山匠作家詩哥合、落梧新月」はない。これは丹本系の編者あたりの追加補注であろう。

四首の本文は皆同じなので、互に関連しているとみてよい。四首のうち、⑥⑦は正徹の謫居説、⑧⑨が定家再来説による後年の追補歌で、原本や定本には収録されていなかったであろうことは、すでに論及したことがあるので、詳しくはその方に譲り、ここでは、巻三末尾に、いつ誰れの手で、なに故に追補されたかの疑問に触れるにとどめたい。この諸点に関しては、田中氏に詳しい論がある(附論文)。氏は、正徹の謫居説を伝える諸書のうち、寛文以前の著作と思われる、林春信の「梅村載筆」の「屏風の繪替梧桐と三ヶ月の歌、又七月十五日歌など世に名高し」に注目され、それと内閣三本(この歌群をもつ)が林家と直接関係のある蔵書印をもって、いることなどを考慮され、

漢とした正徹伝説はそれ以前よりあるが、『草根集』中にこの四首を加えて形を与えたもの、それは林羅山一統の者ではなかったか。それは諷世のわざを戒める道学者流の意図に出たものではなかったか。定家再来伝説にまつわる歌二首も含められているが、思えば定家もまた諷刺の歌を詠んで勅勘を蒙っているのである。

と推測されている。

因に、この「ちらせ猶」の歌によって謫居されたということは、神宮文庫の「三光院殿聞書」にもみえているので、室町時代より流伝していたろう。また、定家再来説の「とひきゆる」の歌も、『草根集』の歌形で「多聞院日記」天正十三年十二月十四日の条にもみえる。どちらも「梅村載筆」よりかなり以前から流伝していた逸話であるので、この四首が、ある系統の「草根集」に、相当早くから書きこまれた可能性はあるが、現存、古写本類にはみえない。林羅山一統によるものと、そこまで限定できるかはさておき、私も、田中氏のように、江戸初期頃、ある系統(内閣三本の

親本にはすでにあつたか)の巻三末尾に付加されたように思う。後述するように、丹本と内閣三本は系統を異にする伝本であるが、これは、内閣本系統と接触することで、丹本がとり入れ、さらに「畠山匠作家詩哥」と本文校合を行なったのであろう。田中氏は、この歌群が存することで「丹本が底本としたものは純粹寛文本ではなく他系統本と接触したところのある寛文本ではなかったか」(附論文)という論旨の一つの根拠にもされているが、確かに一つの視点になろう。

なお、他に多くの巻があるにもかかわらず、巻三の末尾に追補したのは、「ちらせ猶」を詠出した「畠山匠作亭詩歌」が、文安五年の成立なので、文安四年の詠草の最後に配置させ、ついでに定家再来説に関連する正徹と定家の歌を追補したと考えられる。

次に詞書の④⑤の脱落は、書・竜・穂・金の各本に共通しており、これらが同系統であろうことを示唆する。丹本が④のみ欠いているのは、中間的存在となっている。

ここで、諸本独自の脱落や錯簡に触れておく。

内15本には、「夜釋教(1343)」の歌が欠如している。これは定本にあつてよく、内15本の脱落であろう。また、丹本巻三の脱落歌として

初恋 またしらぬ心のおくの初尾花みたれて露や袖にみゆらん

が指摘されているが(附論文)、これは版本にあるので、国書刊行会本の翻刻ミスであることを申しそえたい。島1本など零本系は、永享六年三月十四日の「山家灯」の歌から、四月二十日の「山納涼」まで、十首の和歌と三つの詞書が、所定のところに欠如し、その後、しばらくして同本文が配置されている。これは、およそ一丁分にあたるので親本あたりの錯簡が、そのまま継承されたために生じたものであろう。

配列の異同はあまりないが、ここでは、丹本のみにもみられる、永享五年三月八日以降の部分諸本と対比してみる。

位置は、一箇所にかたまつて並列されてなく、ある間隔をおいてでてる。卷三への位置付けも日付の順序にそっていない。卷十一冒頭の正月詠草の残存歌のうち、㊶㊷の三首を、ちょうど嘉吉二年詠草の前に配置し、㊸㊹も、十六日、十七日の日付があるので「十八日細河兵部大輔頼久家にて」に着目して、配置した感がある。そのためか、卷三のこの部分にあってしかるべき文安四年冒頭部分の十四首が、卷三になく、そのまま卷十一の冒頭部分に移動し、逆に、卷十一にあってしかるべき、享徳二年正月詠草が、四十七首も欠如しているという奇妙な事態を呈している（四十七首のうち、六首は卷三に混入しているが、他の四十一首の行く方は不明）。卷十一の冒頭部分の集団脱落をめぐって、卷三との間に複雑な混入、錯簡のあったことが予測されるが、なぜ、このような結果になったかは、卷十一で述べることにして、ここでは、以上の事実を報告するにとどめたい。

そこで改めて問題となるのは、㊸㊹の贈答歌である。この二首は他の諸本には存しないが、内容的にみて正徹と義忠の贈答歌として信頼してよいだろう。但し、この部分は卷十一との混入があるので、まず、卷三にあってしかるべき歌かいなかの吟味を必要とする。田中氏は、この贈答歌の詠歌年次は、義忠が修理大夫であったのが「草根集」で、永享六年十月一日以降文安四年正月五日以前であること、また、義有の生存が「草根集」によつて、永享八年九月二十六日まで確かめられることより、永享八年九月二十七日以降文安四年正月五日以前の約十年間と考証された（論文）。しかし、この詠歌年時はもっと範囲が限定できる。即ち「看聞御記」の嘉吉三年五月十八日の条に「畠山修理大夫入道、二大宮司職事令申云々」とあるので、それ以前に出家入道していたことになる。従つて、永享八年九月二十七日以降嘉吉三年五月十八日以前の七年間の詠歌となる。さらに、米原正義氏の御論考によると、「翰林胡蘆集十三」の「大寧寺七周忌」の法語に「王父早卒二南軍」と見えることより、これは大覺寺門跡義昭（尊有）

が、円胤大僧正と通じての反乱を大和に攻めたときのこと、義有の死は永享十一、十二年頃とされている。この推定が正鵠を射たものであれば、先の贈答歌は、義有の死後まもなくのものと思われるので、永享十一、十二年頃の詠となる。いずれにしても、卷三に存在してしかるべき贈答歌ではある。嘉吉二年の後に配置しているのは、記憶によつて、およその年時を推定しての処置であらう。

他の諸本にこの贈答歌が存しないのは、脱落したためであらうか。しかし、この六七行にもわたる贈答歌を、どの諸本もそろつて脱落するとは考え難い。私は、これは原本や定本には本来なかったもので、それ以後、編者（正広）が、どこからかこの歌稿を手に入れ、年時は確定しないが、およその推定によつて、卷三の一連の「當初云々」の中に追補したのではないかと憶測する。尊9本が、定本以後の「文明六年五月九日 正廣」なる奥付をもつ系統本である事実、また、「當初云々」の歌群の最後に配置されていることなど、先の憶測を確証している。この贈答歌追補の問題は、「草根集」の編纂にあたって、正広の手がどの程度加えられているかを示唆するものであつて詳説した。

次に問題となるのは、卷末の㊶㊷の一連の歌である。今、丹本の版本で引用する。

畠山匠作家詩哥合 落梧新月

以下一本ニナン

⑥ ちらせ猶みぬもろこしの鳥もねす桐の葉分の秋のみか月（る特考）

七月十五日

⑦ なか／＼になき玉ならは古郷にかへらむ物をけふのゆふくれ

雪中驚

⑧ とひきゆる雲の驚のは風よりわか色こほす雪の明ほの

おなし題 定家卿

⑨ こゑなくはいかてそれともしられまし雪ふりかゝるあしはらの驚

日次系草根集伝本考(中)

稲田利徳

本誌第三十七号掲載の拙稿においては、「草根集」の、(一)伝本研究の状況、(二)伝本の概要、(三)伝本分類の目的と方法、の各項目にそって論及し、続いて巻別による分類方針のもとで、巻一・二に検討を加えた。本稿も前稿を継承し、以下巻三から巻七までの諸本を通覧し、その留意箇所に着目して、各伝本の性格を追究したい。なお、前稿脱稿後、田中新一氏は、さらに『草根集』秋本系欠巻についての続攷(愛知教育大学研究報告第22輯・昭48・2)なる論考を公表されたので、これを(ハ)論文として援用してゆく。

六、巻三について

巻三は、巻二同様、日次形式の詠草を収録する。詠歌年時は、永享五、六、八、十一、十二年、嘉吉二年、文安四年のものがあるが、このうち、ある程度まとまった詠草のある年は、永享五、六年、文安四年の三年だけで、あとは、嘉吉二年が四月の詠歌のみ、他は一、二箇条の断片的な詠草記事でしかない。そして、各年次の間には、詠歌時期の確定できない和歌を「當初云々」といった書式によって散在させている。「草根集」全十五巻のうち、日次形式の巻は十巻あるが、これほど長い年次(永享五年から文安四年までは十四年間)にわたる詠草を一巻に押し込めているのは他にみられない。これは恐らく、編者が「草根集」の編纂を開始したとき、手元に各年次の詠草がそろっていなかったことに起因するのだろう。現に「永享九年詠草」(大東急記念文庫)のように「草根集」未収録の詠草が、

そっくり独立して発見されてもいる。この意味で、巻三は、編者が詠草拾集や編纂に最も苦勞した巻であり、従って、記憶をたどって記した詠草もあつたろう。

さて、第1表(上編掲出)によって、巻三所持の諸本を抽出すると、丹・穂・書・竜・内15・金・尊9・島9・内18・内10・内4・島1・京・彰・沢庵の各伝本、あわせて十五本を数え、全十五巻のうち、一番多く残存している巻となる。ここではじめて、島9・内18・内10・内4などの諸本が登場し、また、島1・京・彰・沢庵などの零本グループもみえる。また、天理図書館には、「永享五年詠草」があり、これは「草根集」巻三と重なる部分があるので、伝本研究にも援用できる。

まず、歌の出入りの整理から行なう。原則として、二本以上に共通する欠如歌を抽出したが、尊9本のみに見える二首は特異な歌なので併載する。また、この巻には、二本以上に共通する詞書の脱落があるので、この有無もあわせて表示しておく(第5表参照)。

第5表 (○は存在、×は欠如、以下同じ)

番号	所在	歌題	初句
①	134 1	春演體	あらはるゝ
②	163 8	吹風も	
③	168 -6 -7	草の露	
		×	内15
		×	丹
		×	書
		×	竜
		×	穂
		×	金
		○	尊 9
		×	島 9
		×	内18
		×	内10
		×	内 4
		×	島 1
		×	京
		×	彰
		×	一本